
Promise

CHE.R.RY

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P r o m i s e

【Nコード】

N 2 5 3 2 E

【作者名】

C H E ・ R ・ R Y

【あらすじ】

—— ■ 注意事項 ■ —— □ カプリングは新志です—— □ オリキャラです。—— □ 志保ちゃん死ネタです—— □ 最初シリーズです。—— 以上の注意事項を読んだ上で、私（俺）絶対に大丈夫！！って方のみ、読んでください。志保ちゃんを勝手に殺さないで！とか言う苦情は受け付けませんので。こちらも以前やっていたホムペから引っ張ってきた話です。ある程度修正しましたがストーリーは同じです。では、無理だと思った方はB A C Kしてくださいね。

——君がいたから僕がいる

——君が僕の生きてる証

——僕には君が必要で…

——君にも僕が必要ならば

——…ずっと一緒にいよう



□ e s i m o r P

この娘と俺を残して…お前は何処へ行くんだ？

一人で行ってしまうんだね。いつも一緒だと約束したのにな。

笑う時も、泣く時も、永遠に眠る時も。なのに先に一人で…

——迂闊だった。

まさか、まだ組織の残党が捕まりそうになり自殺したジンに代わり、
宮野志保の暗殺を実行していただなんて。

幸せすぎて、気付かなかったのかも知れない。俺も志保も、微妙な変化に。

求めていた幸せを手に入れたと…、俺は世界一幸せなんじゃないかって思っていた…なのに。

俺と幼いこの娘の前で…大切な君が銃で撃たれ赤く染まっていった。ゆっくり地面に倒れながら…。いや、ゆっくりに見えただけ、だろうが。

あの時の感情は忘れない、初めて殺意つてのを感じた。…何度、撃った奴を殺してやろうと思った事か。目暮警部が止めていなかったら俺はきっと……。

悔やんでも、例えば奴を殺したとしてもアイツは戻って来ないのに。

でも、怒りとか悲しみとか悔しさとか…いろんな感情が溢れ出して、止める術を俺はわからなかったんだ。

“アイツを返して”

そう思いながら何度も部屋の壁を殴って涙を流した。枯れる事を知らない涙が、止まらなくて。

アイツがいなくなって何日目かの夜。いや、何ヶ月かもしれない…。

俺はまだ悲しみの中で、一人暗い部屋でベッドに寄り掛かり膝を抱えていた。

…俺はこんなにも弱かったのか。アイツがいないと何も出来ないなんて…。

…それ程、俺にとってアイツは全てだったんだ。

「……………志保…っ」

目をつぶれば瞼の裏には志保がいて、熱い雫が頬を伝う。

——泣かないで。

…志保？頭の中に響くのは確かに志保の声。

——工藤君、もう…泣かないで…。

志保、志保…そう言いたいのにな声がでない。目を開けたいのに、目を開ける事が出来ない。

——いくら悔やんでも、何も変わらないわ。前を見て歩いて…。貴方なら出来るはずよ。貴方は強い人だから…。

俺は強くなてない。出来ないんだよ。当たり前の前向きだった事が、今は出来ないんだよ…。

——あの娘もまだ小さいわ。あの娘には貴方しかないのよ。貴方がそんなんじゃない、あの娘はどうなるの？
あの娘は貴方に、任せたわよ。

無理だよ。俺はお前がいないと何も出来ないんだよ。

——大丈夫。私はずっと見ているから…貴方の事も、あの娘の事も
傍でいつも見ているから。

志保…。

——しっかりしなさいよ。…父親なんだから。

志保…。

——ねえ、工藤君。私はもういない。いくらそうしていても私は返
らないの。…悲しいの…そんな貴方を見るのは…。

志保…っ。

——強くて、輝いてて、腹が立つくらい自信家な貴方の方が好きよ

？だから…笑って欲しいの。

志保。…ちゃんと傍にいろよな…？約束だからな？

——いるわよ。約束するわ。だから工藤君も約束してちょうだい。
もう、悲しまないって。

…約束、するよ志保。だからオメーも約束守れよな。
愛してるよ、志保。世界一、愛してる…。

——私もよ。貴方の事、愛していたわ…。

「…志保」

声を出せたと同時に目も開ける事が出来た。

静かな部屋に俺だけが息をしている。…あれは夢だったのか…。妙

にスッキリとした頭でさっきの事を思い出す。

志保が前を向いて歩けと言った…。俺なら出来ると言った、ずっと傍にいたと言った、約束すると言った。

だから俺も約束を守る。いつまでも、悲しんでなんてられない。俺には守らなきゃいけないー奴がいる。

志保の分もそいつと生きて行くんだ。

俺はそう思い、頬に残る涙を拭った。

——それから数年後。

「おとうさん、なにしてるの?」

「愛美…。ちょっと、お母さんの事を思い出してた」

家のリビングの大きなソファで、俺と赤ん坊を抱えている志保の写真を見ていた。

「ふうん。おとうさん、そのシャシンすきね」

いつも見てるね、と言われて愛美を膝の上に乗せた。

俺と志保の子が5歳になった。どんどん成長して、どんどん志保に似てくる。

名前は灰原哀のアイと明美さんのミをとって愛美にした。

未だ探偵をしている俺は家を空ける事が多い。仕事の際は愛美を博士に預けている。

この娘には寂しい想いをさせていると思う。

「おとうさん、きょう、おかあさんのトコにいこう」

「そうだな…。お母さんも愛美に会いたがってるよ」

「あいみ、きのうおかあさんに、あつたもん」

「そうなのか？ズルイなア…。父さんも会いたいのに」

「おかあさんね、ごめんねって、なんかいもいってたよ」

「ごめんね、か…。アイツらしいよな…」。

「よし、今日は天気もいいしお弁当持って母さんの所行こうな、三人でご飯食べよう」

「やったあ！…。でも、おとうさん、おべんとうつくれるの？」

そう言ってジト目で見上げる顔は志保にそっくりで、生意気な言い方も同じだ。

「父さんだって料理くらいできるんだぞ」

「ホントかしら」

ホント、そつくりだよ。おかしくてククク…と笑った。何が面白いの？と不思議そうな愛美の頭を撫でて、俺はキッチンへ行った。

数時間後。車に乗り、晴れ渡る空の下をスピードをあげて向かった。

志保が眠る静かな場所まで――。

（後書き）

チエリです。短編は2話目っす！まあ、短編は今はホムペから引
つ張ってきていますが、連載が終わったら新しく短編創りたいです
ねー。痛い話かもしれませんが、読んでくださったそのお前！！
（失礼だろ）ありがとうございました！！実はこの短編、これの前
の話もあるのですが、そっちはアップしないかもですね。もろに志
保ちゃん死んじゃうシーンがあるので。では、次は一転してギャグ
をアップしてきますうー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2532e/>

Promise

2010年10月9日05時55分発行